

たものになったかもしれない。そう思うと僕は心が痛む。

『憾』という滝の残したピアノ曲に強く心魅かれた僕は、彼と同じ時間を共有したくなった。そして伝記を読み返しながら、彼がドイツで聴いたかもしれない曲をいろいろ聴いてみることにした。ベートーヴェン、モーツァルト、ショパン、ブラームスと、いろいろ聴いたが、特に心に残っているのはベートーヴェンの交響曲だ。滝自身もドイツに行く前日本での演奏会で何回かベートーヴェンのピアノ曲を演奏しているし、ドイツでは、あの『歓喜に寄す』を書いたシラーの記念館にも見学に行っているの、ベートーヴェンに少なからず興味を持っていたのかも知れない。ともあれ僕はベートーヴェンの交響曲を聴きまくった。どれも聴けば聴くほどよさが分かってくるような曲なのだが、中でも好きなのは『第五番』と『第九番』で、楽章で言えば『第五番』の最終楽章も好きだが、やはり『第九番』の最終楽章の始まりのところがとてもいい。オーケストラの掛け合いのようで、面白い。また『第五番』も『第九番』も最後は力強く終わる。それは、「運命に打ち勝った人間の勝利の歌」であり、「苦悩から歓喜へ」を印象つけるもののように思える。実際に滝がこれらの曲を聴いたかどうかはつきり分らないが、彼も病気を克服して、自分の最後の曲をベートーヴェンのように力強く終わりたくはなかっただろうか。そう考えながら滝の『憾』を聴き直すと、やはり彼は死を意識したように思え、そんな彼の

悲しみや苦しみが僕に伝わってくるような気がして、僕も苦しくなってくる。

今、振り返ってみると、『憾』という曲に出会ったことで、閉ざされていた僕の心はだんだんと開かれていき、前向きな気持ちを取り戻すことができたとように思う。ピアノに触ったこともない僕が、『憾』を自分の手で弾いてみたくなり、密かに練習さえしているのだから…。そんな滝の曲との出会いに僕は感謝している。それにしても滝廉太郎という人はすごいと思う。僕達は、ベートーヴェンやバッハやヴェルディなどいろいろな作曲家の曲を聴くことが出来るし、その気になればどんな楽器だって演奏してみることが出来る。しかし、滝の時代はそうではなかった。西洋の音楽との出会いは彼にとって新鮮な驚きの連続であったかもしれない。滝が「日本の音楽を変えた人」であるといわれる理由は伝記を読んで理解できた。もちろんその事も大切なことなのだろうが、僕にとってもっと大切なことは、滝の曲が僕の心の中の「何かを変えた」ということだ。「何か」というのを言葉にするのは難しいけれど、音楽を聴くことが、作曲者と一体となる、つまり作曲者の気持ちを分かろうとすることであり、そこに音楽を聴く楽しさや喜びを見つげることが出来るのではないかといいことで、今まで漠然としか分からなかったそのことに気づくことができたのがとてもうれしい。

今年の夏は本当に散々だった。失うものや、もう一度やり直したいと思うことがたくさんあった。けれど大きな

収穫もあった。今年の夏ほど音楽を真剣に聴き、音楽に癒やされたと感じたことはない。音楽を聴くことによって前向きに生きるエネルギーももたらしたし、「音楽に一生懸命向き合う自分」も発見できた。それらは、自分の心をみつめ直し、深くし、他の人の気持ちも思いやることにつながっていったと思う。辛かった日々を乗り越えて、こんなふうに見えることが出来るようになったのも、音楽が心を癒やしてくれたからだし、記憶から消し去りたいと思ったあの日々も無駄ではなかったのかもしれない。そのすべての始まりが滝廉太郎の『憾』との出会いだったのだ。

現在、悩んでいる人、苦しんでいる人、心の拠り所を求めている人に僕は僕の経験から教えてあげたい。

音楽を聴くことで、きっと心は癒やされること。



▶ 西洋の音楽で日本の心を歌った作曲家滝廉太郎